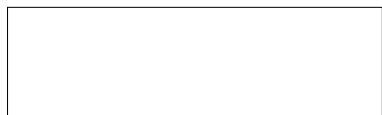


伊勢原の遺跡

調査報告会



平成 26 年 3 月 16 日(日)

午後 0 時 50 分 ~ 午後 4 時 30 分

伊勢原シティプラザ 3 階研修室

伊勢原市教育委員会・公益財団法人かながわ考古学財団

次 第 & 目 次

12:50 ~

開会あいさつ

13:00 ~ 13:30

1 神成松遺跡第5地点

株式会社 パスコ 野尻 義敬..... 1

13:30 ~ 14:00

2 上粕屋・秋山上遺跡

株式会社 パスコ 竹内 順一..... 2 ~ 3
休 憩

14:10 ~ 14:40

3 西富岡・向畑遺跡

(公財) かながわ考古学財団 新山 保和..... 4 ~ 5

14:40 ~ 15:10

4 伊勢原市 71遺跡

(公財) かながわ考古学財団 木村 吉行..... 6 ~ 8
休 憩

15:20 ~ 15:50

5 子易・中川原遺跡、伊勢原市 163遺跡

(公財) かながわ考古学財団 中村 雄紀..... 9 ~ 10

15:50 ~ 16:20

6 上粕屋・石倉中遺跡第2地点

(公財) かながわ考古学財団 小川 岳人..... 11 ~ 12

16:20

閉会あいさつ

伊勢原市内では、新東名高速道路建設事業や厚木秦野道路建設事業、県道 603 号線道路改良事業等に先立ち発掘調査が行われ、数多くの遺跡が見つかっています。今回の報告会では、最新の調査成果について、発掘調査を実際に担当した調査員に解説していただきます。

開催にあたりましては、公益財団法人かながわ考古学財団と共催し、株式会社 パスコ、神奈川県広域幹線道路事務所、中日本高速道路株式会社の御協力をいただきました。御理解に感謝いたします。

かみなりまつ
神成松遺跡第 5 地点 (伊勢原市 74)

株式会社パスコ 文化財センター 野尻義敬

所在地 伊勢原市上粕屋 1429-3

調査期間 平成 25 年 5 月 7 日～10 月 22 日

調査面積 1441,51 m²

1 遺跡の立地

遺跡は神奈川県西部、丹沢山塊の霊峰として知られる大山の東側に形成された上粕屋扇状地上に立地します。調査区は南側を開析された段丘の南側傾斜地に位置し、北から南に傾斜する段丘縁辺部から傾斜地となっています。東西に延びる法面を境に、北側平坦面(以下、上段。標高 75～77m 前後)と南側平坦面(以下、下段。標高 73m)に分かれます。

2 調査の成果

近世では宝永火山灰層を覆土とする畝状遺構が調査区全体で確認されたほか、法尻に沿うように溝状遺構が 1 条確認されました。

中世では竪穴状遺構 2 基、掘立柱建物址 2 棟、土坑 5 基、焼土址 1 基、土坑墓 1 基、段切り状遺構 1 基が検出されました。現地表面でも確認できる法面は、この時期に行なわれた台地整形の影響と考えられます。土坑墓からは 2 体分の人骨が確認され、ひとつの土坑に複数埋葬される例は稀少ですが、副葬品などは出土していません。

古代では土坑 54 基、畝状遺構 1 基が検出されました。円形土坑は耕作に関連すると考えられており、連綿と農作地として利用されていた様相がうかがえます。

弥生時代から古墳時代では、竪穴住居址 3 軒、土坑 2 基が検出されました。そのうち 1 軒は焼失住居でした。包含層からは条痕文土器が出土しています。

縄文時代では竪穴住居址が 1 軒、集石が 5 基、陥し穴が 3 基検出されました。この時期の調査成果として特筆すべきことは、草創期の微隆起線文土器の出土です。同一面には石器も散在しており、局部磨製石斧や石槍など草創期にも見られる石器であることから、土器と伴う可能性があります。

3 まとめ

本遺跡は、縄文時代草創期から人類の生活痕跡が確認でき、土器を使用するようになった人々の活動を考えるうえで貴重な資料です。また古代からは耕作地として利用され、中世の大規模な台地整形、宝永火山灰が堆積したまま廃棄された畝状遺構など、当時の社会生活を知るうえで重要です。



縄文時代草創期の微隆起線文土器

上粕屋・秋山上遺跡

株式会社パスコ 文化財センター 竹内順一

所在地 伊勢原市上粕屋 2905 番 1 他
調査期間 平成 24 年 12 月 3 日～平成 26 年 2 月 28 日
調査面積 4,021 m²
発見遺構 礎石建物跡・掘立柱建物跡・竪穴状遺構・土坑・地下式坑・井戸・溝・道路・土壌墓・畝・段切遺構・ピット(近世以降)掘立柱建物跡・土坑・地下式坑・井戸・溝・埋納遺構・ピット(中世)掘立柱建物跡・土坑・溝・ピット(古代)住居跡・土坑・集石・焼土跡(縄文)
出土遺物 中・近世陶磁器・土師器・須恵器・縄文土器・鉄製品(近世)・銅製品(中・近世)・銭貨(中・近世)・石器(縄文時代)・石製品(近世)・木製品(近世)

1 遺跡の立地

発掘調査は神奈川県広域幹線道路事務所による県道 603 号(上粕屋厚木)の道路改良工事に伴い、事前の発掘調査として平成 24 年 12 月より実施しました。遺跡は伊勢原駅から北東約 3 kmの上粕屋地区に所在し、大山の裾野に広がる上粕屋扇状地内の標高 60m前後の河岸段丘上に立地しています。

2 調査の成果

調査では、中世～近世の建物跡やそれに付随する地下式坑・井戸・溝・畝・段切遺構や縄文時代の住居跡や土坑・集石など多数の遺構が確認されました。

建物は 18 棟確認され、中世の掘立柱建物跡から近世以降の礎石建物への変化の様子をとらえるこ

とができます。建物跡を取り巻くように掘削された多数の溝は、等高線に平行もしくは直行しているものが多く認められ、排水のための施設と考えられます。地下式坑と連結しているものもあり、降雨後の湧水・排水に苦慮していたことがうかがえます。これは扇状地の縁辺部に立地する本遺跡の特徴としてとらえられます。

中世のピット状の浅い掘り込みからは、多量の銭貨が出土しました。銭貨は北宋銭で 4747 枚(63 さし)を数え、最も多いのは「元豊通寶」で 578 枚でした。中央の穴に紐を通した束となっており、束が同じ方向に揃えられた状態で出土しました。銭貨埋納遺構と考えられます。

縄文時代の住居跡は 4 軒確認されています。後世に削平を受け、遺存状況は良くありません。いずれも敷石住居跡と考えられ、出土遺物から縄文時代後期の所産と考えられます。J2 号住居跡では、透閃石岩製の磨製石斧などの石器類や壁際からは堀之内 1 式の深鉢が横倒しの状態で出土しています。

3 まとめ

今回の調査では、中世から近世以降にかけての建物跡・地下式坑・多数の溝・井戸・畝・段切遺構などが継続的に構築されていたことが確認されました。これは、この地域における扇状地縁辺部の集落の在り方を示すものとして重要な成果と考えられます。



上粕屋・秋山上遺跡 5 a 区全体図



C1号埋納遺構検出状況



J1号住居跡完掘状況

にしとみあか むこうばた
西富岡・向畑遺跡(伊勢原市 160 遺跡)

中世集落と縄文時代の発掘調査

公益財団法人かながわ考古学財団 新山 保和

所在地 伊勢原市西富岡 120 他
調査期間 平成 19 年 4 月 1 日～調査中
調査面積 31,133 m² (調査終了地区含む)
発見遺構 地下室・畝・溝・道・土坑・ピット(近世以降)、^{たてあなじょういこう} 竪穴状遺構・^{ほったてはしらたてもの} 掘立柱建物跡・^{ちかしきこう} 地下式坑・炭焼き窯・井戸・溝・道・土坑・ピット(中世)、^{たてあなじょうきよあと} 竪穴住居跡・^{くわだて} 掘立柱建物跡・土坑・溝・道・杭列・ピット(古墳時代末～平安時代)、^{しきいしじゅうきよ} 敷石住居跡・^{みずば} 水場遺構・^{はいせき} 配石・^{うめがめ} 埋甕・^{しゅうせき} 集石・^{おびじょう} 带状粘土列・土坑・杭列・ピット(縄文時代)、石器集中・^{れきぐん} 礫群集中(旧石器時代)
出土遺物 陶器・磁器・かわらけ・^{せきせいひん} 石製品・金属製品(中世・近世)、^{はじき} 土師器・^{すえき} 須恵器・^{かいゆうとうき} 灰釉陶器・^{りょくゆうとうき} 緑釉陶器・石製品・金属製品・木製品(古墳時代末～平安時代)、土器・石器・土製品・石製品・木製品(縄文時代)、石器・礫(旧石器時代)

1 遺跡の立地

西富岡・向畑(伊勢原市 160)遺跡は、中日本高速道路株式会社による新東名高速道路建設に伴う事前の発掘調査として、平成 19 年度から調査を実施しています。遺跡は伊勢原市北部、西富岡地区の丘陵地帯に所在しています。地形上は西側を南流する渋田川に、東を南北に連なる富岡丘陵に挟まれた台地上の標高 50m 前後の南西向きの^{かんしゃめん}緩斜面と平坦地に立地しています。

2 調査の成果

平成 24 年度後半から 25 年度にかけての調査では、6 区の古代と縄文時代の調査と、10 区の中

世と縄文時代の調査、15 区の近世から古代、縄文時代～旧石器時代の調査などを実施しました。

中世では、埋没谷の西側で長軸 6 m、短軸 4.5 を測る大型の井戸が見つっています。本遺跡では 7 基の井戸が見つっていますが、その中でも最大の井戸となります。井戸の中からは、大型礫と一緒に大型の動物骨が複数見つっています。また、地下式坑が複数見つっており、床面にピットが 14 基検出されているもあります。その床面直上からは、長さ 35 cm、幅 4 cm を計る刃物と思われる鉄製品が出土しています。

古代の調査では、住居跡が丘陵斜面の標高の高い位置からも見つっており、広範囲に集落が展開することが分かってきています。

縄文時代の調査では、埋没谷西側に位置する 10 区で、谷肩から一段下がった平坦部に縄文時代後期(称名寺式～堀之内式期)の敷石住居跡が 1 基見つっています。この住居跡からは、ミニチュアの^{ませいせきふ}磨製石斧や石皿などが出土しています。埋没谷の東側に位置する 6 区では、縄文時代中期から後期の住居跡が 6 基見つっています。同様に埋没谷の東側に位置する 15 区では、縄文時代後期(称名寺式～堀之内式期)の敷石住居跡が 1 基見つっています。

旧石器時代の調査では、15 区の L2 相当層から礫群に伴って石器が出土しています。9 区からも同時期の文化層と見られる礫群に伴った石器が出土しています。

3 まとめ

中世の調査では、埋没谷を挟んで両側から同時期と見られる地下式坑やピット群、井戸が見つかり、集落が両側に展開していたことが窺えます。これは古代や縄文時代の集落からも同様な

傾向が見られます。谷の形成及び埋没時期は定かではありませんが、谷＝水を中心として集落が展開していた様相が窺えます。これは、人間の活動に水が不可欠な要素だったことを想起させます。



埋没谷周辺の中世遺構配置図



10 区中世の地下式坑



10 区縄文時代の敷石住居跡

伊勢原市 71 遺跡

粟窪地区の発掘調査

公益財団法人かながわ考古学財団 木村 吉行

所在地 伊勢原市東富岡、粟窪
調査期間 平成 22 年 10 月 1 日～調査中
調査面積 14,525 m²(平成 22 年～平成 25 年)
発見遺構 段切り・道状遺構・溝状遺構・畝状遺構・井戸跡・土坑・ピット(近世)、段切り・道状遺構・溝状遺構・掘立柱建物跡・地下式坑・井戸跡・土坑(中世)、竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑(奈良・平安時代)、竪穴住居跡・竪穴状遺構(古墳時代)土坑・ピット(縄文時代)、遺物集中箇所(旧石器時代)
出土遺物 陶磁器・土器・土製品・石製品・金属製品・銭貨(中世・近世)、土師器・須恵器・土製品・石製品(奈良・平安時代)、土器(古墳時代)、土器・石器(縄文時代)、石器(旧石器時代)

1 遺跡の立地

伊勢原市 71 遺跡の発掘調査は、中日本高速道路株式会社東京支社厚木工事事務所による新東名高速道路建設に伴い、平成 22 年 10 月から継続して実施しています。遺跡は、小田急小田原線伊勢原駅の北方約 2 km の標高 35～37m ほどの台地上及びその周辺に位置しています。台地の 0.5 km ほど東側に歌川、0.6 km ほど西側に渋田川があり、北西から南東へ流れています。

2 調査の成果

平成 25 年度は 3 区、4 区、6 区、8 区、6 区南東、調整池の調査を実施しました。

近世の遺構は、各調査区で発見されました。調整池では、掘立柱建物跡の柱穴と思われるピットや井戸跡が確認されていて居住施設が存在していた可能性が考えられます。他の調査区では、畝状遺構・芋穴と呼ばれる長方形の土坑、溝状遺構など畑作に関連するような遺構のみが見つかり、主に畑地として利用されていたことが判明しました。

中世の遺構は、6 区南東と調整池で発見されました。6 区南東は段切り・道状遺構・溝状遺構が主体ですが、南側では掘立柱建物跡と地下式坑が検出されました。道状遺構は調査区東端で南東から北西に延びるもの、調査区中央付近で南西から北東に延びるものが発見されており、調査区北側で合流していました。東端の道は低地と台地を結ぶ道で、側溝を伴っています。掘立柱建物跡は段切りによって造り出された平場で確認されました。等間隔に並ぶ 8 基の柱穴が 2 列検出されましたが、南側が削平されていて規模は明らかになっていません。柱穴内からは、13 世紀代の青磁の碗や酒会壺といった舶載磁器や渡来銭が出土しています。調整池は調査中ですが、段切り・溝状遺構・硬化面・竪穴状遺構・掘立柱建物跡・地下式土坑・井戸跡・土坑など多数の遺構が発見されています。もともとの地形は南東に向かって傾斜していますが、整地して平坦面を造り出し生活面としていることが判明し、2 面の生活面が確認されました。調査区の西端で検出された溝状遺構は、北から南へほぼ直線的に流れ、南西隅で南東方向に折れ曲がっていました。規模は上部幅

が広い所で約 2 m、確認面からの深さ約 0.8m を測ります。竪穴状遺構は長辺 2 ~ 3.5m ほどの長方形または正方形に近い形を呈しています。中には入口部分と考えられるスロープを有するものもありました。掘立柱建物跡は、2 間 × 2 間の 1 棟を確認したのみですが、柱穴と思われるピットが多数検出されていることから、さらに別の建物が存在していたものと思われる。

奈良・平安時代の遺構は、3 区、4 区、6 区、6 区南東で発見されました。4 区以外の調査区では竪穴住居跡が検出され、集落が北側や南側の斜面地にまで広がっていたことが明らかになりました。6 区で検出された住居跡からは 9 世紀代の遺物が出土しています。

古墳時代の遺構は、3 区で発見されました。3 区では平成 23 年度の調査で古墳時代前期と後期の竪穴住居跡が検出されましたが、今回の調査では前期の住居跡が 2 軒重複した状態で見つかったのみでした。新しい方の住居は、1 辺約 5 m の正方形に近い形をしており、床面から炉が検出されたほか、北側の壁面に貯蔵穴と思われる 1 × 0.5m ほどの四角い穴が見ついています。竪穴状遺構も前期の遺構です。1 辺 2.5m ほどの正方形に近い形をしており、床面からは完形に近い土器が 2 個体出土しました。

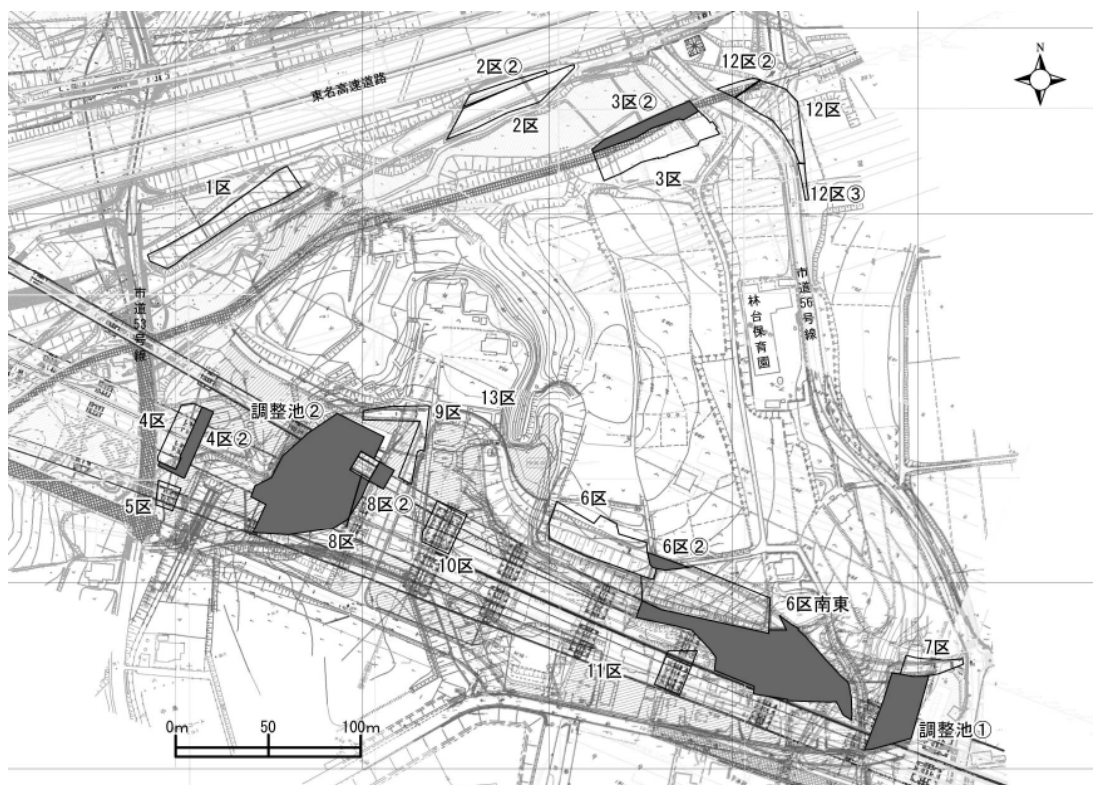
縄文時代の遺構は 4 区と調整池で発見されました。4 区で検出された土坑は土器を伴っていましたが、土器には文様が認められませんでした。出土した層位から縄文時代中期の土器と思われる。

旧石器時代の遺物は、6 区南東の南側の斜面地

で見つかりました。出土したのはいずれも剥片で、石材は黒曜石・チャート・凝灰岩が認められました。出土層位は、2 万 9 千年 ~ 2 万 6 千年前に降灰したと考えられている始良丹沢火山灰 (A T 層) を含む層よりも下層と思われる、伊勢原市最古の遺物の可能性が考えられます。

3 まとめ

これまでの調査で栗窪地区の土地利用の変遷がだいぶ明らかになってきました。近世には台地上及び周辺で畑作が営まれていたようです。住居は台地の南側の低地際に点在していたと思われる。中世の遺構は、台地の南側に位置するすべての調査区 (6 区南東・11 区・10 区・9 区・調整池) で発見されました。各地区とも遺物はそれほど多く出土していませんが、13 世紀 ~ 16 世紀のものが認められ、15 世紀代、16 世紀代が主体を占めています。南東に位置する丸山城との関連を考える必要があります。奈良・平安時代、古墳時代の竪穴住居跡は北側と西側を除く低地際でも発見されました。集落が台地上だけでなく、斜面地や低地際まで広がっていたことが判明しました。縄文時代の遺構や遺物はそれほど多く発見されていません。台地上で尖頭器や石鏃が出土していることから狩場として利用されていたと思われる。6 区南東で発見された旧石器時代の遺物は剥片のみでしたが、A T 火山灰の下層から出土したと考えられ、伊勢原市最古の遺物の可能性があります。現在火山灰分析を行っており、結果が待たれるところです。



伊勢原市 71 遺跡(栗窪地区)平成 25 年度調査範囲図



調整池 掘立柱建物跡(中世)

子易・中川原（伊勢原市 123）遺跡・伊勢原市 163 遺跡

子易地区の発掘調査

公益財団法人かながわ考古学財団 中村雄紀

所在地 伊勢原市子易（子易・中川原）
上粕屋（伊勢原市 163）

調査期間 平成 25 年 7 月 10 日～調査中
（子易・中川原）
平成 25 年 5 月 17 日～調査中
（伊勢原市 163）

調査面積 3,448 m²（子易・中川原）

調査面積 1,914 m²（伊勢原市 163）

発見遺構 子易・中川原 溝・道路跡・畝状遺構
・井戸跡・土坑・ピット（近世）、集石・土坑
・ピット（中世）

伊勢原市 163 道路跡・水田跡・土坑（近世）、
溝・道路跡・土坑・ピット（中世）

出土遺物 子易・中川原 陶磁器・土器・金属
製品・銭貨（中世・近世）、土器・石器（縄文
時代）

伊勢原市 163 陶磁器・金属製品・石製品・銭貨
（中世・近世）、土器・石器（縄文時代）

1 遺跡の立地

伊勢原市西部の子易地区一帯では、大山から
流下する鈴川の河岸段丘上に多くの遺跡が存在
することが知られています。子易・中川原遺跡
は鈴川右岸の標高 120m 前後の地点に位置し、昨
年度鎌倉～南北朝時代の頃の屋敷跡が発見され
た子易・大坪遺跡に近接する地点にあたります。
伊勢原市 163 遺跡は鈴川左岸の標高約 100m の
地点に位置します。

2 調査の成果

(1) 子易・中川原遺跡

子易・中川原遺跡ではこれまで主に中世・近
世の遺物や遺構が見つかっています。この地区
にはかつて和銅山安楽寺わどうさんあんらくじという寺院が明治時代
まであったことが伝わっており、調査地の西側
隣接地には現在も墓石等の一部が残されていま
す。このため発掘調査でも寺院に關係する施設
の跡が見つかるものと期待されていましたが、
少なくとも江戸時代の後半には調査地の大部分
は耕作地として利用されていたようであり、畠
の跡うねじょういこう（畝状遺構）が広がっていました。この他
には道路跡、地割を区画する溝跡、井戸跡や屋
外炉と見られる遺構などが見つかっています。
遺物はとりわけ溝や斜面で、捨てられたり流れ
込んだりしたと見られる陶磁器類が多く出土し
ています。17～19 世紀のものが多く、土瓶・播鉢
・皿・碗など様々なものが含まれています。ま
た、寺院との關係が考えられる遺物としては仏
飯器ぼんきなど仏具の破片や「...千部成就」と刻まれ
た石碑断片など石造物も見つかっています。

一方、これら近世の遺物に混じって中世の遺
構や 13～14 世紀頃に遡る陶磁器類（中国陶磁、
かわらけなど）も見つかっています。

(2) 伊勢原市 No.163 遺跡

伊勢原市 No.163 遺跡では主に中世・近世の遺
構・遺物が見つかっています。特に重要なのは
石敷道路状遺構いしきどうろじょういこうの発見です。これは幅約 3.6m の
規模をもつもので、両側に大型の礫を並べ、そ

の間に小型の礫を敷き、その上に砂利を敷いて突き固め路面を作るという構造であったと考えられます。道路という性格上、遺物はほとんど見つかりませんが、13世紀頃に遡る陶磁器が僅かながら道路の石敷きの上から見つかることから、道路は鎌倉時代に構築されたものと推定されています。

3 まとめ

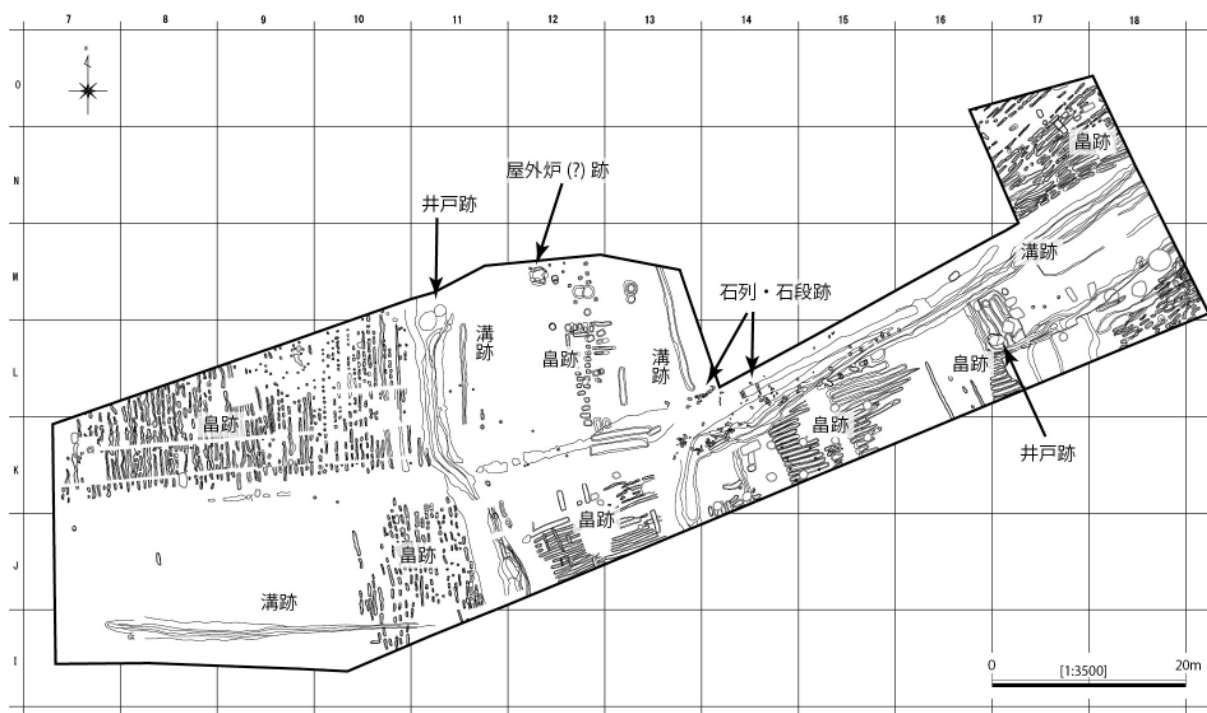
子易・中川原遺跡では廃棄されたと見られる近世の生活用具の他、寺院に関連する資料が見つかりました。また、現段階で見ついている中世の遺物は近接する子易・大坪遺跡の屋敷跡と同時期にあたる13～14世紀のものが見られ、今後の調査で2つの遺跡の関連が明らかになる可能性があります。また、伊勢原市 No.163 遺跡の石敷道路状遺構も近い時期のものと考えられます。この

時代、こうした大規模な工事を要する道路の出土例はごく稀であり、鎌倉幕府やそれに関わる権力者が建設に関わった可能性が高いと考えられます。

子易地区では道路状遺構や子易・大坪遺跡の屋敷跡など、この時代、この地に有力な勢力が存在したことを示しています。現在継続中の調査により、今後とも伊勢原の中世史を明らかにする上で重要な発見が期待されます。



伊勢原市 No.163 遺跡石敷き道路状遺構



子易・中川原遺跡近世遺構配置図

上粕屋・石倉中遺跡（伊勢原市 40 遺跡）

近世大山道と古墳の発掘調査

公益財団法人かながわ考古学財団 小川 岳人

所在地 伊勢原市上粕屋 1493-2 番地他
調査期間 平成 25 年 9 月 16 日～調査中
調査面積 2,100 m²(平成 25 年度)
発見遺構 道状遺構・溝・墓・土坑・畝状遺構・ピット・竪穴状遺構・石組・硬化面（近世）、古墳周溝（古墳時代）、集石・埋甕（縄文時代）

1 遺跡の立地

上粕屋・石倉中遺跡の発掘調査は、一般国道 246 号線（厚木秦野道路）建設事業に伴い、平成 25 年 9 月から着手しました。遺跡は大山の裾部南側に広がる扇状地に所在し、鈴川とその東の涸谷に挟まれた台地上に立地します。遺跡のある台地は大山から南に向かって緩やかに下り、遺跡が所在する標高は 88m ほどです。

2 調査の成果

上述の台地中央を大山へ通じる県道が通っていますが、今回の発掘調査区はその西側に位置し、ちょうど鈴川の崖線と県道に挟まれた形になります。平成 23 年にかながわ考古学財団が調査した地点は県道を挟んで東側になります。

現在も継続中の調査では、近世、古墳時代、縄文時代の遺構・遺物が発見されています。なお、縄文時代については調査を継続中であることから、ここでは既に調査を終了した近世および古墳時代の遺構・遺物について述べておきたいと思えます。

近世

調査区のほぼ中央付近で、北西から南東にのびて調査区を横断する大変大きな道状遺構を発見

しました。幅は約 10m、深さ 1 m の掘割状を呈し、底面はローム層を掘り込んで、堅い地業を施してあります。また両側には側溝状の溝が掘られていました。その規模と現在の県道と並走する方向から、近世の大山道と推定されます。

道状遺構は数回にわたって作りかえられた痕跡が観察され、片側に低い石積みを伴っていた時期もあるようです。底面近くから 17 世紀代の前半代の陶磁器が発見され、遺構が埋没した後形成された畑の畝に宝永火山灰が堆積していたことから、道は 17 世紀前半代に開削され、宝永火山灰が降った 18 世紀初頭には埋没していたことがわかります。きわめて規模の大きな道ですが、改修を施されながらも比較的短期間のうちに使われなくなったと思われます。しかしながら、遺跡周辺にお住まいの 60～70 代の方からうかがったお話では、まだ子供のころには場所によって掘割のような窪みが残っていたといい、また昭和 60 年代の航空写真にも所々に道跡らしい痕跡を読み取ることが可能なことから、相当の長きにわたって地形的な痕跡を地上にとどめていたのでしょう。

この道状遺構の両側では数棟の掘立柱建物、土坑、竪穴状遺構等が発見されました。建物の軸が道状遺構とほぼ合っていること、また周辺から 17 世紀代の陶磁器が発見されることから、道状遺構が道として使われていた時代にともなうものと思われる。おそらくは道の両側に屋敷地が広がっていたものでしょう。なお、18 世紀以降の遺物は見つかっていません。あるいは道が使われなくなるのにあわせて、屋敷地も別の場所に移動した

ものと思われます。

古墳時代

調査区の西側、鈴川の崖線寄りでは古墳が3基発見されました。しかし、近世段階で大きく削平され、死者を埋葬した石室や墳丘は全く失われていました。古墳を囲んでいた溝（周溝）の底の部分だけがわずかに残され、古墳があったことだけわかります。遺物もほとんど出土していません。

縄文時代

縄文時代については現在も調査を継続中です。縄文時代後期前半の土器が多数出土しているこ

とから、この時期の集落が予想されます。

3 まとめ

近世の道状遺構は、この時代の大山について考えていく上で非常に重要な発見となりました。今後は遺構の内外から出土した遺物の検討を含めて考えていく必要があるでしょう。

遺跡の調査は現在も継続中です。隣接地も今後の調査予定に入っていることから、より広い範囲を調査することにより、各時代の遺構のより詳細な展開が明らかになるものと期待されま



近世道状遺構（写真奥が完掘状態。手前は石積みを残している。）

伊勢原の遺跡調査報告会

発 行 日 平成 26 年 3 月 16 日

編集・発行 伊勢原市教育委員会

